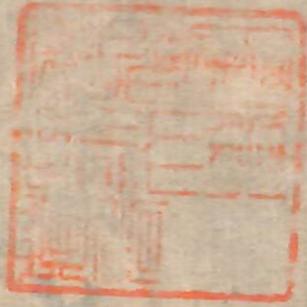


源氏物語  
完

913.55  
ケ



此源氏物語之先源氏之君の事...  
 此君を... 桐壺の院...  
 其... 兼... 博士...  
 物... 方物... 義...  
 の宮上東...  
 中...  
 子...  
 此...  
 海...  
 皇...



石山  
 近江  
 八景  
 月秋の  
 外  
 ぬ  
 ぬ

近江  
 八景  
 石山の  
 月秋の



此源氏物語の事ハ往古より貴賤と人との好也。或他書  
 亦越より。さきバ此道の先達心切小。さぬぐ。ある註解を加  
 ころ。書籍牛ふ汗一棟子充るふ不堪其志一あるものと  
 いへども。其本文ども讀得る事か。又後をとりて解  
 きたるも亦う。ま。故人の註釋せる。河海明星孟津  
 眠江辨り。萬水湖月の類卷數多き大部の品。更にも  
 以らむ十帖をさる源氏葉の轉り。紹巴抄忍草等。あて向  
 合をささる。こからく。をさる。者か。一覽をるも  
 た中をく。終。五十四帖の繪を寫し。画上ハ一首。終うたを  
 あけ。兒童の眼ふ。ふ。聊物語のゆき。より。を。

天保丁酉の冬再版

李園主人志る後

此源氏物語の事ハ往古より貴賤と人との好也。或他書  
 亦越より。さきバ此道の先達心切小。さぬぐ。ある註解を加  
 ころ。書籍牛ふ汗一棟子充るふ不堪其志一あるものと  
 いへども。其本文ども讀得る事か。又後をとりて解  
 きたるも亦う。ま。故人の註釋せる。河海明星孟津  
 眠江辨り。萬水湖月の類卷數多き大部の品。更にも  
 以らむ十帖をさる源氏葉の轉り。紹巴抄忍草等。あて向  
 合をささる。こからく。をさる。者か。一覽をるも  
 た中をく。終。五十四帖の繪を寫し。画上ハ一首。終うたを  
 あけ。兒童の眼ふ。ふ。聊物語のゆき。より。を。

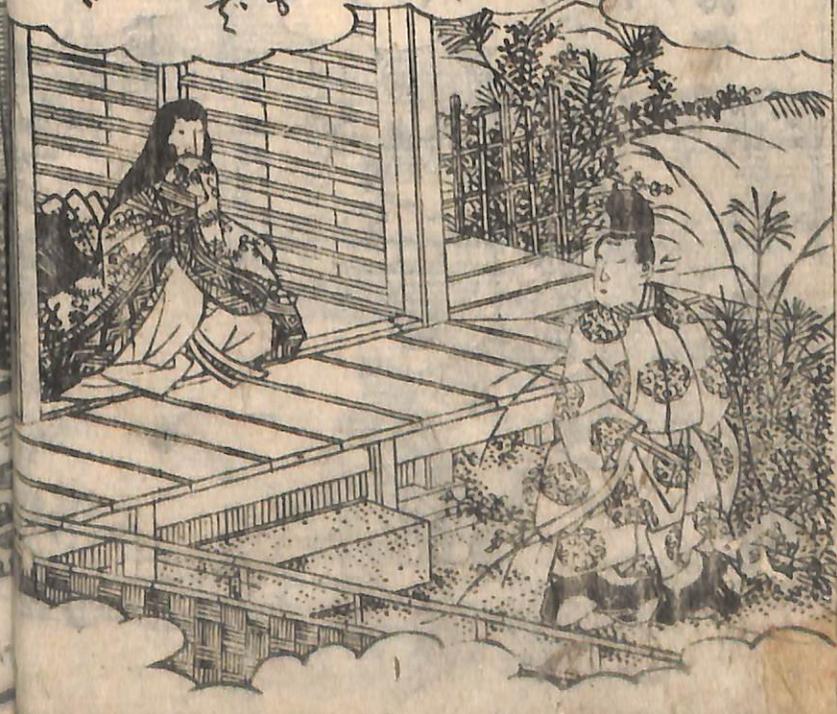


とあけたりやうのふ  
 るはりのほりの月  
 ちまひくちりろか  
 りて人との耳目を  
 かどろくまかどろく  
 ぶりをあそびく  
 はくろくまかどろく  
 てまのまきとて成  
 式部小作せらま  
 けままきまのち石  
 山寺小運次て  
 成事をいのり中  
 拍も八月十二日  
 の月湖水ふらつり  
 こおのつらつらつ  
 ままこころまき小拍

後のさの空かたり  
 そひまゆふうふ  
 なるをうまきね先  
 小とて佛華あり  
 ける大般若のねじ  
 をかきふすうけ  
 てまが頂テの石の  
 やこまねをかねとあ  
 たりまきま頂テの  
 美小こひひみみ  
 ありたりとあや  
 りとてうけとあ  
 成後まきとあま  
 幸うきんげのち  
 大般若經一部六百  
 卷をとりつらかき



第本  
 教前  
 ぬまを  
 おろく  
 かの  
 うまふ  
 あらう  
 あらう  
 けき



空蟬  
 うけ  
 せまの  
 けを  
 うま  
 木の  
 めとふ  
 あか  
 人か  
 乃  
 明  
 うな





まぶしてうたのそと  
 ありふた武藝の名を  
 あらうては武藝と  
 号せしむなり

一説云ふ武藝の名也  
 うたのそとせしむる後  
 友の花のありふたの  
 字亦改めしむる

或説云ふ一説つ流の  
 りのこころの上東院  
 におもはせりしとてさ  
 かりのものにあはれ  
 かりあせとすさ存流  
 ひたふふよりそは名を  
 ともしり

すはありのあまを  
 八月十五夜の月遊水  
 うつて物遊のそと  
 室らうらぶをさすれぬ  
 されぬと佛前の煙  
 文をひらいてうける  
 との儀は実あまを  
 用ひさるとあり

大般若經一巻を書  
 て神納け義はさる  
 るとあり  
 須磨の美奈保氏の  
 させんのみをうた  
 八西の宮の元大臣  
 言明公云々  
 此説信どぐりとの

ままの  
 末摘花

おのり  
 うら  
 の

まま  
 けん  
 けん



あまの  
 けん  
 けん



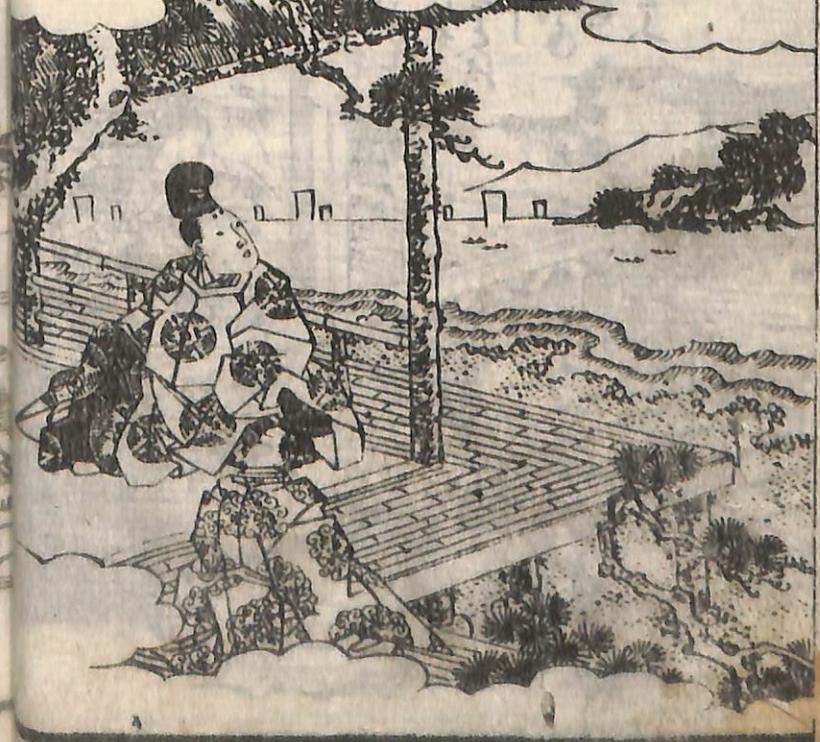




幸万水一森小云醜嗣  
 朱雀村上は三代小准  
 ざるありまゝ六桐壺  
 のみくどを六延森。朱雀  
 を六天慶。冷泉院を六天  
 曆小比一廿り光保氏  
 の君を六延森の西子西  
 の宮の元大臣言明公  
 小比ざるあり周公且  
 東征雲壺相在納云の  
 一ありを思ひ又光君  
 友重の古所壺通の事  
 小在承の羽林二条の后  
 小壺通の依相似する  
 小准ざるあり  
 你氏ハ朱雀院壺壺院

あど書さる小あり  
 て宇多の天皇より  
 臨さのありありあり  
 のさるいね祝あり  
 一一条院の在時の  
 さぬをあらささ  
 いひさるさるものと  
 思ふべし  
 此物語作者の事  
 宇治大納言物語小  
 曰今八むり一紙の  
 守為時とてさるる  
 る世小さるりあり  
 なる人ハはさささ  
 ありありはははは  
 氏ハはははははは

須磨  
 宇治の  
 いせの  
 おもむを  
 おもひ  
 かな  
 する  
 すはの  
 唄  
 まで



明石  
 秋の  
 雲井を  
 うけ色  
 雪の  
 する





室へて信へがけ  
を

は物徳院本一せり  
あつらひの河海

抄孟洋抄等ふ二  
は成の自筆の本

もころへく今世ふ  
はるる源の光

の八本を以て校  
合取捨し家本

とせりいりあ  
二条帥伊房本

冷泉中納言朝隆本  
堀河九大臣後房本

美表紙とのふ  
九大臣の筆跡

後一位藤子本  
土御門右大臣女

系極北政前  
法庵寺園白本

尚侍友本とのふ  
二条三位後成本

東極中納言定家本  
青表紙とのふ

おのの院本とのふ  
とも密異同あり

古写本をうんぐ合  
せし且つ見を加ふ

あまふ後ふ古今の  
美言あり  
河内本八河内の子

関屋

あふ  
さうの  
せきや  
いりあ

あふ  
なまご

志げま  
あまふの

中を  
いりあ

三

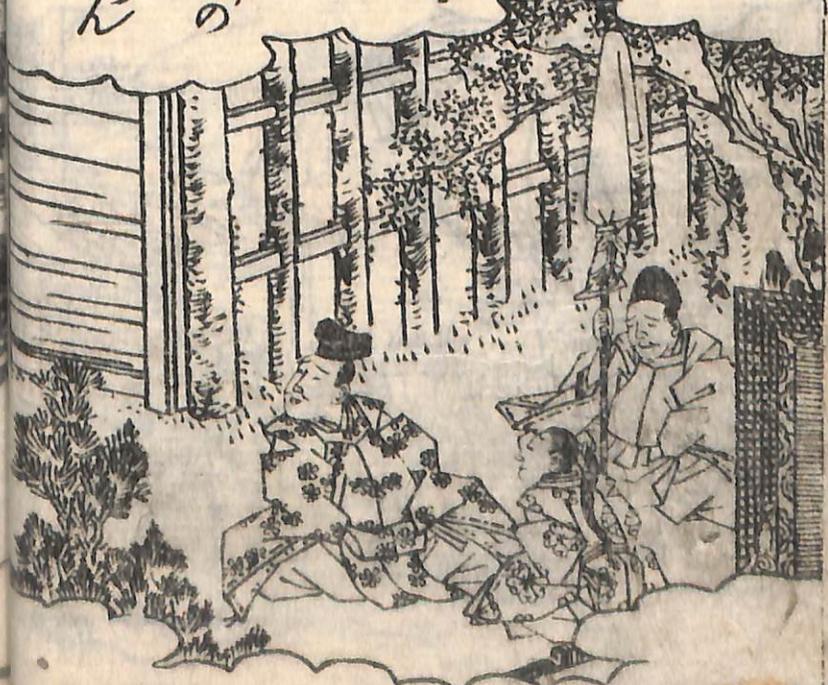
繪合

うきあ  
その

をり  
けの

あふ  
あふ

あふ  
あふ









世の抄物小見けさ  
 りく八吉抄小あへる  
 を引くくひを今又  
 かとうがとらる言中  
 のうちくひ河内  
 ふもあま青表紙小  
 もあまよきを用ひ  
 わききをのぞれく  
 なるべきふとまぶく  
 うりのくり今の  
 世小作のるとあろハ  
 りつとも作写のあや  
 まりうづつひのち  
 がひ脱落深きま  
 ーてきとーづま  
 不意きひあゆめ

どのへ糸極美門を  
 えりあ母々の先達  
 心をつて海くひて  
 あまはまそ貴就他  
 書小こころあま小  
 徳本との小あまの  
 まくあくーそ昔か  
 身一まのひろく式  
 船が回ををのりて  
 そのゆきをうしあ  
 ざるまああぐー  
 よろこぶー  
 更科の記小云あ祿  
 まもちあどやうの  
 人々のその物ぐり  
 うのもののぐり光跡

胡蝶  
 花どの意  
 出てふを  
 さや  
 志  
 妹まの  
 むん  
 うとく  
 えん



身をも  
 わがま  
 やつる  
 こそ  
 りん  
 まま  
 れのひ  
 あらん



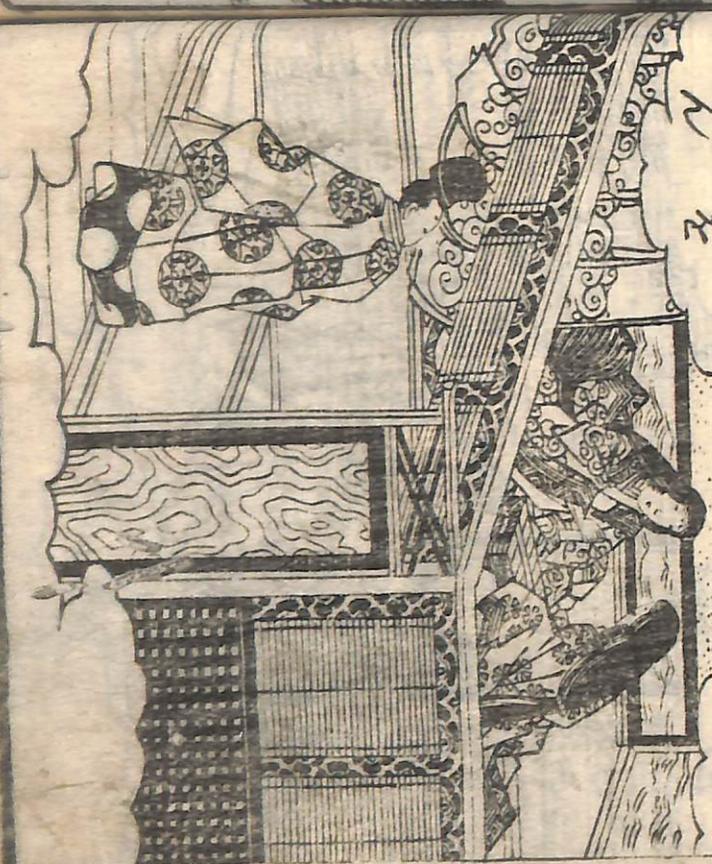
此卦之象  
 乃火之象  
 故曰火  
 火之性  
 炎而上  
 故曰炎  
 炎之性  
 燥而烈  
 故曰烈  
 烈之性  
 焚而燬  
 故曰燬  
 燬之性  
 焦而枯  
 故曰枯  
 枯之性  
 槁而朽  
 故曰朽  
 朽之性  
 爛而敗  
 故曰敗  
 敗之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛  
 爛之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛

火之性  
 炎而上  
 故曰炎  
 炎之性  
 燥而烈  
 故曰烈  
 烈之性  
 焚而燬  
 故曰燬  
 燬之性  
 焦而枯  
 故曰枯  
 枯之性  
 槁而朽  
 故曰朽  
 朽之性  
 爛而敗  
 故曰敗  
 敗之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛  
 爛之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛



此卦之象  
 乃火之象  
 故曰火  
 火之性  
 炎而上  
 故曰炎  
 炎之性  
 燥而烈  
 故曰烈  
 烈之性  
 焚而燬  
 故曰燬  
 燬之性  
 焦而枯  
 故曰枯  
 枯之性  
 槁而朽  
 故曰朽  
 朽之性  
 爛而敗  
 故曰敗  
 敗之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛  
 爛之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛

火之性  
 炎而上  
 故曰炎  
 炎之性  
 燥而烈  
 故曰烈  
 烈之性  
 焚而燬  
 故曰燬  
 燬之性  
 焦而枯  
 故曰枯  
 枯之性  
 槁而朽  
 故曰朽  
 朽之性  
 爛而敗  
 故曰敗  
 敗之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛  
 爛之性  
 穢而濁  
 故曰穢  
 穢之性  
 臭而腐  
 故曰腐  
 腐之性  
 爛而敗  
 故曰爛









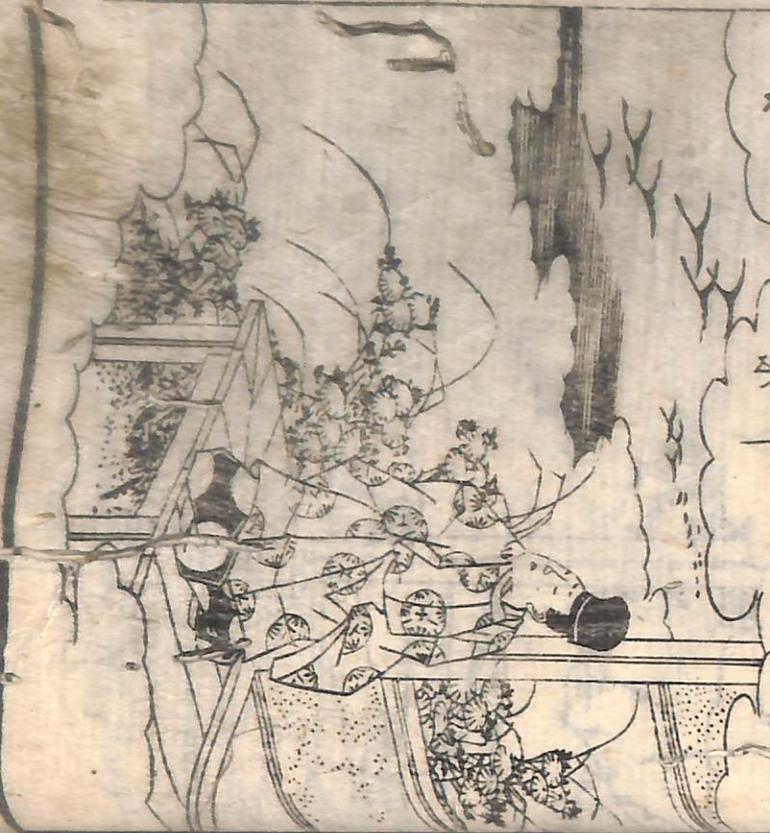






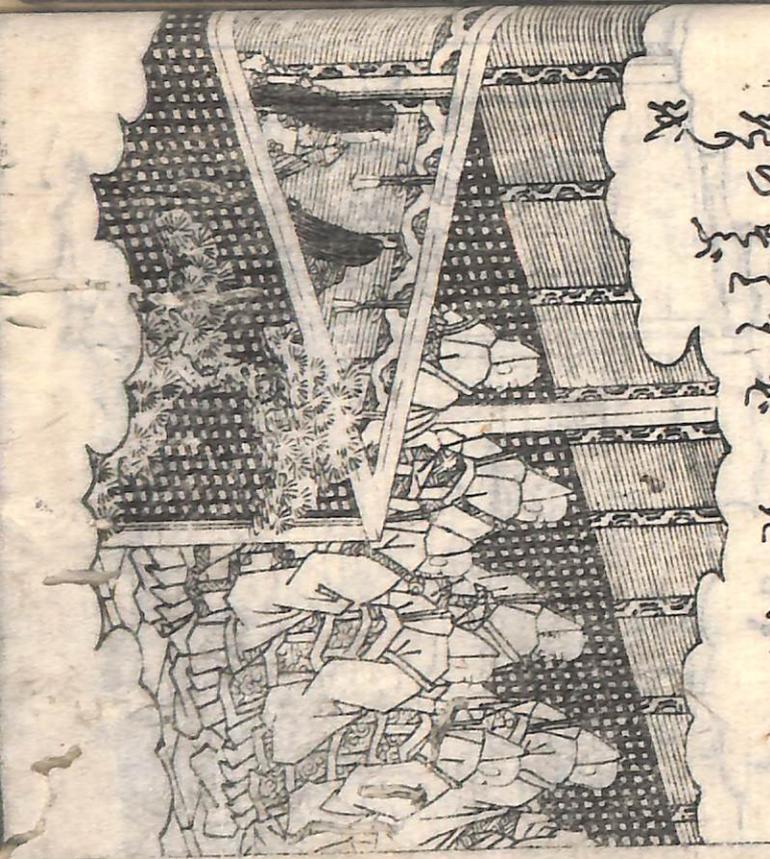
Handwritten text in a cursive script, likely a transcription of a speech or a chapter section. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left.

Handwritten text in a cursive script, positioned below the main text block on the right page. It appears to be a continuation or a specific note related to the main text.



Handwritten text in a cursive script, continuing the transcription from the right page of the top spread. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left.

Handwritten text in a cursive script, positioned below the main text block on the left page. It appears to be a continuation or a specific note related to the main text.





化をうーうふふ  
 多うふふふふふふ  
 ての國おちめふふ  
 窓もまふふふふふ  
 ぶさるふふふふふ  
 抱ごりふふふふふ  
 のふふふふふふふ  
 情をつふふふふ  
 り且おせいのふふ  
 めくさぬをふふふ  
 せり所をふふふ  
 こふふのふふふ  
 もとふふの人の  
 氣うふふふふふ  
 まふふふふふふ  
 せりふふふふふ

情をえふふふふ  
 とまおふふふふ  
 けのふふふふふ  
 化をのふふふふ  
 けり申ふふふふ  
 のふふふふふ  
 ぶさるふふふふ  
 おそびハ君子の  
 ぶさるふふふふ  
 のあそびをふふ  
 ぶさるふふふふ  
 俗ふふふふふ  
 うふふふふふ  
 けのふふふふふ  
 んと人のふふふ

竹川  
 けけ  
 えうら  
 ひと  
 ねうき  
 こころ  
 そふ  
 まり



橋  
 ひめの  
 こころ  
 うら  
 さげ  
 さわの  
 志の  
 ねえ  
 ねえ  
 ねえ



好父の身をまつり  
いとふしうあま  
秘く世の人ふれ  
あそぶるあひ君  
のおとりのあふん時  
まさくのうしと  
あんのうらうざ  
なりのまふはの  
がたりあふいえ  
う上も王者の選凡  
をあふんあふんや  
このあふんあふん院  
もは物ごりあふん  
日本の至宝とあふ  
あふりあふんあ  
あふんあふんあ  
あふんあふんあ  
あふんあふんあ

河内守親行

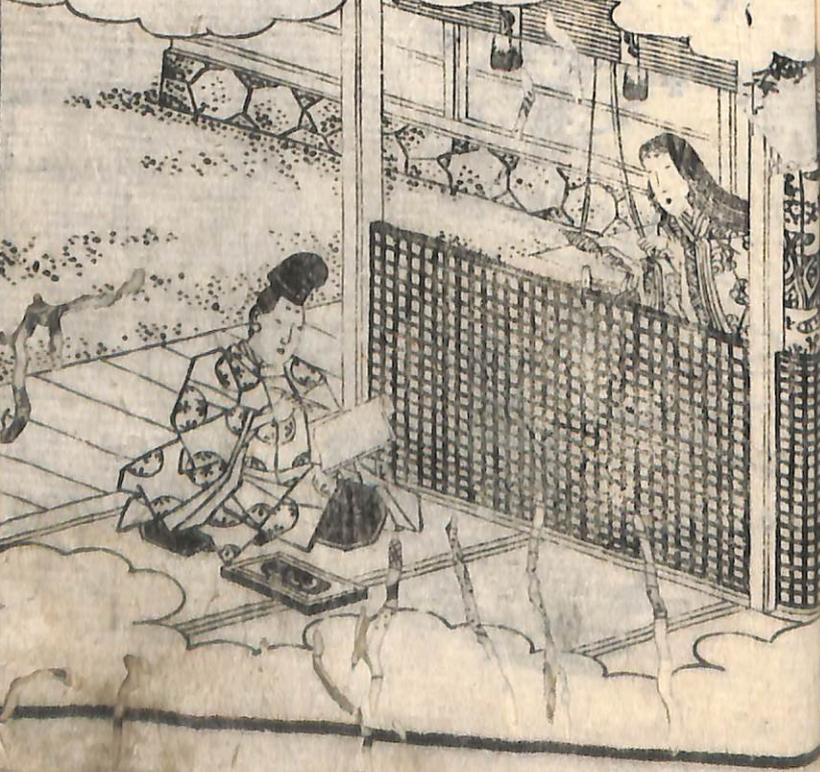
後小素寂法師  
とのふ

久明親王より係  
氏の位をせとあ  
けよとあふんあ  
けよとあふんあ  
二巻をあふんあ  
そのあふんあ  
あふりあふんあ

あふんあ  
推中  
たふん  
うげと  
このあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ

あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ

あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ  
あふんあ







重基

敬  
御  
師  
阿  
浪  
伸



御  
師  
阿  
浪  
伸



家宗

法  
相  
宗  
家



法  
相  
宗  
家





